

大橋志帆 <公務員の使命とは何か－私が「地域に飛び出す公務員」となるまでの軌跡>

<要旨>

私は昨年（2013年）、勤続20周年を迎えた。共働き家庭に育った私には、「男性は仕事、女性は家庭」という固定観念はなかった。男女平等と思っていた公務員だが、就職した当時、仕事内容には男女の格差があった。自分の意識や行動を変えることと、周囲のバックアップ体制により、私は成長することができた。勤続10年目、1つ目の転機が訪れた。新任主任研修を機に「地方自治」「市民との協働」について深く考えるようになった。勤続20年目に2つ目の転機が訪れた。公務で関わったNPO法人が危機に直面したことにより、私は個人の活動としてNPO法人を応援しようと決意した。公務員の使命とは、地方自治の発展に貢献することであり、これは公務員が地域の中で活動することによって実現できる。私は、働きたいと願う人が一人でも多く働ける社会の実現を目指している。これは公務経験の中で見出だした目標であり、仕事という枠を超えた、私自身の生き方でもある。

寺松みどり <性はグラデーション～わたしたちのせい（性・生）を考える～>

<要旨>

本レポートのテーマは、昨年（2013年）9月に、私が勤務する岐阜市女性センターにおいて、市民団体の“人間と性”教育文化センターの協力を得て開講した〈講座の名称〉である。

「個性をいかしながら生きていける社会」こそ、『人権』が守られた豊かで幸せな社会といえる。自分のことも相手のことも大切にその「心」こそ、人権の始まりであり、『男女共同参画社会』の目指す姿でもあるはずである。『すべての人のため』の男女共同参画社会を築いていかなければならない。私は、彼ら彼女らが、社会の中で十分に理解を得て、毎日心穏やかな生活が送れるよう、「環境を整えていく一助」になりたいと述べた。

この講座では、「セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）」が直面する問題を知り、当事者を招いて体験談や感じていることを聞くなどして理解を深めていった。

私が「セクシュアル・マイノリティ」支援者の一人として歩み始めるきっかけとなった市民団体との出会い、そして『せい（性・生）』を通しての気づきやエピソードをもとに、「人権」「男女共同参画社会」をみつめなおし、今後、私のやるべきことについて書き記した。

渡辺美恵 <問題を見逃さず、話しあって、家庭も地域も男尊女尊に>

<要旨>

嫁という立場になった途端、行動は狭められ、私の発言は疎んじられた。なぜ、どうして、ともがけばもがくほど心はむなしく空回りするばかり。自分の気持ちを表現する言葉さえ知らないまま、元気さと正義感だけが頼りだった20代。ところが、公民館での女性問題学習をきっかけに、国際的視点、家父長制や性別役割分業なども学び、わが意を伝える言葉と勇気を得たことで、夫や義母との生活にも変化が生まれたのである。そして、地域にあっては仲間と活動10年後にNPO法人を設立し、様々な課題解決に取り組んでいる。

以上のように本レポートは、問題を見逃さず、話しあって、家庭も地域も男尊女尊にしたいという大きな夢への挑戦を、数多くのエピソードを交ぜながら、正直に、綴っている。

加えて東日本大震災後は、避難されている方々との交流・支援をきっかけに培われた信頼を糧に、避難体験の聞き書き『3.11の現実－そして、私たちはこの町にきた』を発行。復興支援は途切れることなく続いている。これからも創意豊かに挑んでいくつもりである。